＜実践事例＞

大学職員を対象とした東南アジアでの英語研修における一考察

山下　辰夫[1]・堀田　幸平[1]・佐藤　克信[2]・林　大介[3]・北波　赳彦[4]

近年は大学にグローバル人材の育成が求められており，京都産業大学は，2012 年に文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」に採択され，その構想調書のなかで事務職員の語学力向上についても言及している。グローバル人材の定義は様々であり，もちろん一般教養をはじめとした能力も求められるが，語学能力は必須であり，京都産業大学では事務職員を対象に海外語学研修を毎年実施している。本稿は 2014 年の夏にタイのチェンマイ大学で今年度より新たに実施された研修に参加した 5 名の報告をまとめたものである。研修の内容を中心にまとめており，次年度以降に本研修が継続されるかは現時点では未定であるが，もし継続されるのであれば本稿が研修参加者の参考となれば幸いである。また，本プログラムがより良いものとなるために帰国後に行った振り返りをもとに研修プログラムへの改善等についても言及している。

キーワード：海外語学研修、英語学習、自己啓発、SD、グローバル

1. はじめに

昨今，日本企業の現地法人における海外売上高は 2003 年に約 145 兆円だったものが，2013 年に 199 兆円に達し，10 年間で約 1.4 倍へと大幅に増加している。また海外生産比率も同様に，10 年間で約 1.3 倍の大幅増加を示している。こうした状況から，日本企業の多くの社員が将来海外勤務をする可能性があり，企業では海外研修制度を設けている企業も少なくない。しかし，「海外赴任が決まってから海外に慣れさせる」といった考えでは，日本を取り巻くグローバルな流れからは遅れを取ってしまう。そのため，企業は早期より海外慣れをしたグローバル人材を求めており，大学での教育においてもその要求に応える努力が必要である。

一方，企業や大学教育におけるグローバル化が進むなか，学生の育成に携わる事務職員の状況はどうであろうか。本学で独自に行った 2011 年度の「事務 PT 英語力向上アンケート」によると，専任職員では 5 年以上の海外経験を持つ人はおらず，1 年以上の人はわずか 5%，1 ヶ月～ 1 年未満が 15% であった。また，英検，TOEIC，TOEFL について換算表を参考に 5 段階のランク分け（ランク 1 が最も英語力が高い）を行ったが，検定経験のないランク 5 が半数を超えるなど，グローバル人材の育成を掲げている大学としては満足できる状況とは言い難い。一方，「自分にはもっと高い英語力が必要だと感じることがありますか」という問いに対して，8 割近くの回答で英語力の必要性に肯定的な回答が見られた。

こうした状況を踏まえ，事務職員がチェンマイ大学での海外語学研修に参加することで，英語能力を向上させることが期待された。

2. 研修参加までに

研修プログラム策定においては，本学の窓口となっていた国際交流センター事務室からチェンマイ大学の語学センター（Language Institute Chiang Mai University。以下，LICMU とする）の担当者におおまかな要望を出し，それに基づき LICMU 側によって研修プログラムが考案され，研修業務の主幹部署である総務部が実施の最終決定を行った。

研修参加までに LICMU の担当者が来日して本学を訪問する機会があり，そこで研修参加者 5 名は担当者よりチェンマイ大学について簡単なプレゼンテーションを受け情報交換を行った。この時点では宿泊形態はホームステイということであったが，諸般の事情により最終的にチェンマイ大学の学生寮での滞在ということになった。研修参加

[1] 京都産業大学 学生部，[2] 京都産業大学 教学センター，[3] 京都産業大学 進路・就職支援センター，[4] 京都産業大学 経理部

までにあらかじめ設定されていた到達レベル等はなかったため，各自が自発的に留学に備えての英語学習に取り組む程度であったが，できることならば事前の研修サポートが実施されればより効果的であると考えられる。留学後に行った振り返りにおいても留学自体には全員が満足しているが，留学前後のサポートがなかったため，何をどこまでやればよいかという指針が欲しかったという意見が多かった。

ただし，ビザの申請をはじめとした事務的な手続きからチェンマイ大学とのやりとりまでトータルにサポートしていただけるので，そういった点においては海外経験がない職員であっても比較的参加しやすい研修プログラムであるといえる。

今回は，アメリカ・イギリス・カナダ・オーストラリア・シンガポールなどの英語を母国語とする国ではなく，あえて東南アジアのタイが選ばれた。これに対しては研修参加者の我々も当初は「なぜ英語学習をするうえでタイなのか」というのは疑問に思ったことでもある。しかし，タイでの英語研修は欧米圏と比べて研修費用が格段に安く，また英語を母国語または公用語としていない東南アジアの人々（一般の人，大学生）でも当然のように英語を話せることを直接，肌で感じることも目的の一つである。費用面からいうと今回の本研修は，語学学校費用・滞在費（寮費）・航空券・ビザ申請費用等すべてを合せて，一人あたり約 20 万円であった。アメリカ・イギリス・カナダ・オーストラリアでは同様のプログラムに参加する場合は 40 万円以上の費用がかかることから，タイでの語学実習の安さがわかる。

今回の語学研修でチェンマイ大学の語学学校である LICMU が採用された理由は，本学の新しい協定校であり（2014 年 2 月），留学受入先となる LICMU の担当者の対応が適切かつ親切であり，また，教員にアメリカ人ネイティブ講師，イギリス人ネイティブ講師も多く，職員研修受け入れにあたっての提案内容が研修主旨に沿ったものであったからである。

3. チェンマイ大学および LICMU の概要

チェンマイ大学の位置するチェンマイは，タイ北部の地方都市であり首都バンコクから北西 720km の距離にある。ラーンナータイ王国の首都として古くから発展し，ラーンナータイ王国が廃止された現在でも北部の文化・経済の中心である。全国人口統計によると，2012 年 2 月現在，チェンマイ県の人口は 168 万人を超えているが，チェンマイ県の中核の都市であるチェンマイ市は 14 万人程度である。人口では東北部のナコーンラーチャシーマーを下回るが，その歴史の長さや都市の格から，一般にバンコクに次ぐタイ第 2 の都市とされている。学術都市，観光都市としての色合いが強く，京都産業大学の位置する京都とも類似している。

チェンマイ大学は市中心部の西部に位置しており 4 平方キロメートルという広大なキャンパスを構える。キャンパスは，一部に老朽化が見られるものの，17 の学部と 3 研究所を持つ総合大学で学生総数は 2 万 4000 人に及び，タイ北部随一の規模である。歴史は，タイの中では古く，1964 年に国立の地方大学として創設され，2014 年は創設 50 周年に当たる年であった。

タイにおいては高等教育の質保証のために，各大学を教育と研究の二分野において五段階で評価している。チェンマイ大学については，タイ高等教育委員会により教育分野，研究分野ともにランキング 1 とされており，現在，タイ国内屈指の名門大学である。（表 1 参照）

図 1. チェンマイ大学の語学センターオフィス（LICMU）

表 1. タイにおける大学ランキング

ランキング	教育分野	研究分野
1	チュラーロンコーン大学、コーンケーン大学、チェンマイ大学、マヒドン大学	チュラーロンコーン大学、チェンマイ大学、マヒドン大学、モンクット王工科大学トンブリー校、スラナーリー工科大学
2	カセートサート大学、モンクット王工科大学トンブリー校、スラナーリー工科大学、ラーチャモンコンエ科大学クルンテープ校	カセートサート大学、コーンケーン大学、ナレースワン大学、国立開発行政研究院（NIDA）
3	タクシン大学、メーファールアン大学、ワライラック大学、シラパーコン大学、ソンクラーナカリン大学、ウボンラーチャターニー大学、ラーチャモンコンエ科大学シーウィチャイ校、国立開発行政研究院（NIDA）	ブーラパー大学、シーナカリンウィロート大学、シラパーコン大学、ソンクラーナカリン大学、モンクット王工科大学ラートクラバン校

本研修受け入れ先であるLICMUのすべてのスタッフは，流暢な英語を話し，英語だけでなく中国語も話せるスタッフもいた。また，事務の仕事だけでなく，講義を受け持つスタッフもいた。こういった姿は，採用方法やシステムの違いこそあれ，同じ大学職員として大いに刺激となるものであった。

LICMUでは，海外からの留学生獲得に積極的であり，LICMUにおいて同時期に学んでいたのは中国・香港からの留学生が主であり，彼らも含めチェンマイ大学で学ぶ学生の多くは学生寮に入居し，集団行動を重んじる慣習にある。

キャンパス内には学内移動用の無料電気自動車が走り，学生たちはそれを利用し広大なキャンパスを移動している。本研修は英語学習が主目的であったが，日本とタイの大学生活の違いを実際に自分たちの目で見ることができ，大学職員として大変良い体験であった。例えば，タイの大学生たちはほぼすべての学生が寮生活をしており，寮は大学のキャンパス内もしくはキャンパス近隣に位置している。学生たちは朝から晩まで大学とその近隣のみで過ごすことが一般的であり，いわば大学生活の大半をその大学で過ごすことになる。大学の周辺には何百という屋台が立ち並び，また学部ごと，寮ごとに学生食堂が設置されており，学生たちは朝食と夕食をその屋台や学生食堂で食べる。日本でいうところの縁日が毎日開催されているような雰囲気であり，大学周辺は夜中2時頃まで学生たちで埋め尽くされている。

図2. 大学の周辺は夜中まで多くの学生でにぎわう

滞在した学生寮は大学から徒歩5分ほどのところにあり，昨年完成されたばかりの最新式で留学生も多数入居している。Wi-Fi環境が整っているのはもちろんのこと，プール，スポーツジム，レストラン，コンビニといった設備も充実しており，各自の部屋も定期的な清掃がなされ清潔な環境が維持されていた。大学近くの学生寮に滞在できたことでタイの大学生活を目の当たりにすることができたことは大変良い経験になり，次年度以降も同形態の宿泊を薦めたい。

4. 研修報告

4.1. 研修概要

本研修は14日間にわたるプログラムであり，内容は大きく2つのセッションに分かれていた。ひとつは教室内でのネイティブ教員による英語講義であり，もうひとつは英語を通じてのタイの伝統文化体験である。基本的にプログラムは大学職員向けであることから授業は本学からの参加者5名のみで実施された。

LICMUでは中国を中心に世界各国から留学生が英語やタイ語を学びに来ていたが，基本的には同大学の学生だけでクラスが編成されていることから，LICMUで語学研修を受講する際に他大学の学生たちと英語講義で一緒になることはない。そういった点は他大学の学生たちと交流する機会が持てず残念な部分ではあるが，日本からの語学研修者は少人数クラスで編成されるため，日本の大学で受講する一般的な授業よりも大変恵まれた環境で学習することができる。また，伝統文化体験の際は常にLICMUのスタッフが複数名随行してくれるため，サポート体制はアメリカやカナダといった国へ留学するよりも大変効果的である。

14日間の研修プログラムのスケジュールは次頁のとおりである。

4.2.1. 英語講義について

英語講義は，今回の研修参加者5名のみの少人数クラスで行われ，内容も大学職員として今後活用する機会の多いものに特化されていた。これは前述したとおり本学から事前にLICMU側にそういった要望をしていたからである。アメリカ人2名とイギリス人2名の計4名の教員が順次交代する流れによる授業が展開され一般英語（6時間），ビジネス英語（24時間），スピーチ・プレゼンテーショントレーニング（15時間），マンツーマン英会話（4時間）の計49時間で構成されている。LICMUでは英語のネイティブ教員が多数在籍するため，英語の講義においてはすべて彼らによる講義を受講することができる。いずれの教員も講義以外の昼休みやプログラム外のアクティビ

ティ，SNS などでも友好的に接してくれるため内向き志向が多いとされる日本人にとっては大変良い環境である。

ただし，クラスが本学からの参加者のみということもあり，その参加者たちの英語レベルが違い過ぎると講義の進行に支障が出るため，例えばTOEIC スコアで 400 ～ 600 といった一定の基準を設けておくことが望ましいと考えられる。

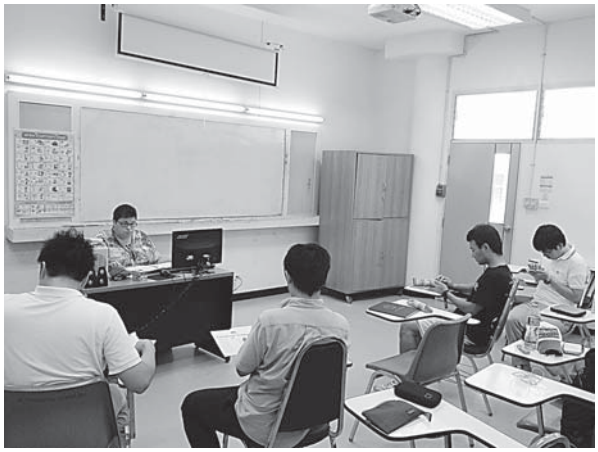

図 3. ネイティブ教員による英語講義

ここからはそれぞれの講義について述べていく。AJ（アジャーン）とはタイ語で「教師･先生」の意味である。

4.2.2. American AJ ①

自己紹介トレーニングでは，研修参加者がお互いに初めて会うという前提で講義が進められ，英語による自己紹介をし合い，そこで知り得た情報を，教員に他己紹介するという内容であった。ビジネスでは必須である名刺交換をはじめ，円滑にコミュニケーションをとるための練習を行った。少人数教育を活かし徹底的に何度も反復練習がなされ，大変効果的な学習であり，まずは英語をとにかく口に出して話すことを意識させる点に重きを置いた講義であった。

4.2.3. British AJ ①

英語での電話応対において一般的に用いられる応答話法や，使用頻度の高い英語表現等を学んだ。

具体的には，受信した電話に対する応対の仕方，相手に自分の要望を伝える際に用いるフレーズ，相手の電話を第 3 者に取り次ぐ手法等を，「顧客からの要望を電話で受ける」というビジネスに関する英会話トレーニングの中で培った。

.

4.2.4. British AJ ②

ボディーランゲージやアイコンタクト，Transition（for example，in other words 等の接続詞）の活用方法，プレゼンテーションで話す際に適した態度や声のトーンの重要性を学んだ。実践トレーニングでは，いかに相手に分かりやすく，印象付けることが出来るかという点に重点が置かれた。

後半のプレゼンテーショントレーニングでは，教員が選択したテーマに関して，2 分間自分の考えや意見等を述べるというトレーニングであり，瞬時に話のアウトラインをまとめる力や，それらを分かりやすい英語で伝える力を身に付けることが出来た。

最後は，「今回の研修について，自分の上司に報告する」というテーマで，5 人全員が各 20 分間のプレゼンテーションに取り組んだ。研修参加者は事前にアウトラインだけを決め，本番に臨んだ。はじめは，2 分間でさえ時間が持たず伝える内容が全く出てこないという状態であったが，最後は全員が 20 分間にわたるプレゼンテーションを成功させることができ，十分な成果を感じることが出来た。

4.2.5. American AJ ②

想定される様々なビジネスシーンで英語を活用するためのトレーニングを積んだ。具体的には，電話応対の練習，ビジネスにおけるフォーマル，インフォーマルなメール文書の作成とその使い分け，道を聞かれた際の相手への伝え方，あるテーマについてお互いが考えや意見を言い合うディベートの練習等，内容は多岐にわたった。

ここでは，それぞれのビジネスの場での英語の使い方はもちろん，発音・文法の重要性についても学んだ。正しい単語で話したとしても，発音や文法が正しくなければ，相手に正確に伝えることは出来ない。英会話は，こうした発音や文法の基礎があって，初めて成立するということを学んだ。

4.2.6. LICMU スタッフとの英会話

今回の研修には，ネイティブ教員による英語講義以外に LICMU の現地タイ人スタッフとマンツーマンで英会話をする時間が設けられた。講義で得た知識や手法，語彙力を活かして，相手の伝えたいことを聞き取り，自分の伝えたい内容を教員以外の相手に伝えるというアウトプットを行うものであった。LICMU スタッフとマンツーマンで行われたこの英会話トレーニングで驚いたことは，担当したチェンマイ大学のスタッフ一人ひと

表 2. 研修スケジュール

８月	DAY	時間	研修プログラム
16（土）		夜	関西国際空港出発
17（日）	DAY1	午前	チェンマイ国際空港到着，LICMU スタッフとの顔合わせ，入寮
		午後	チェンマイ大学までの通学路の確認，スタッフによる旧市街の案内
18（月）	DAY2	午前	講義：自己紹介・他己紹介のトレーニング（AmericanAJ①）
		昼	ウェルカムランチ
		午後	体験：チェンマイ大学キャンパスツアー
		夜	チェンマイ伝統料理とラナダンス鑑賞
19（火）	DAY3	午前	講義：名刺交換・small talk のトレーニング（AmericanAJ①）
		午後	体験：チェンマイ市芸術文化センター見学
		夕方	講義：英会話トレーニング（LICMU）
20（水）	DAY4	午前	講義：電話応対トレーニング（BritishAJ①）
		午後	講義：自己紹介ビデオ撮影及びフィードバック（AmericanAJ①）
21（木）	DAY5	午前	講義：プレゼンテーショントレーニング①（BritishAJ②）
		午後	体験：ラナダンスレッスン
		夕方	講義：英会話トレーニング（LICMU）
22（金）	DAY6	午前	講義：プレゼンテーショントレーニング②（BritishAJ②）
		午後	講義：プレゼンテーショントレーニング③（BritishAJ②）
23（土）	DAY7	終日	体験：ドイ・インタノン国立公園見学
24（日）	DAY8	夜	体験：ワット・プラ・シン参拝，サンデー・マーケット見学
25（月）	DAY9	午前	講義：プレゼンテーショントレーニング④（BritishAJ②）
		午後	講義：20 分間プレゼンテーション（BritishAJ②）
26（火）	DAY10	午前	講義：電話応対トレーニング（AmericanAJ②）
		午後	体験：ムエタイレッスン
		夕方	講義：英会話トレーニング（LICMU）
27（水）	DAY11	午前	講義：メール文書作成トレーニング①（AmericanAJ②）
		午後	講義：メール文書作成トレーニング②（AmericanAJ②）
28（木）	DAY12	午前	体験：Teacher's day セレモニー参加
		午後	体験：エレファントキャンプ見学
29（金）	DAY13	午前	講義：道案内トレーニング（AmericanAJ②）
		午後	講義：ディベートトレーニング（AmericanAJ②）
		夕方	講義：英会話トレーニング（LICMU）
30（土）	DAY14	午前	体験：プー・ピン宮殿見学，ドイ・ステープ寺院参拝
		昼	フェアウェルランチ，修了式
		夜	チェンマイ国際空港出発
31（日）		午前	関西国際空港到着

りの英語力が非常に高いということである。同じ大学職員ではあるが, LICMU のスタッフは英語での会話の基本や発音も高いレベルで完成されており，研修参加者にとって，今後の英語力向上に向けた取り組みへのモチベーション向上に繋がった。

4.3. タイの伝統文化体験

英語講義と並んで，本研修のもうひとつ大きな目的として，英語によるタイの伝統文化の学びがあげられる。ここでは，日頃の講義で培った英語力を，タイの伝統文化を学ぶ中で実践するという目的も含まれていた。

寺院や博物館などの見学，伝統舞踊やムエタイ体験を通じて，タイの伝統文化を学ぶだけでなく，

自国の日本文化を学ぶことの重要性も学んだ。スタッフがタイの文化を英語で説明する様子を見て，果たして自分たちにこのような説明が出来るのであろうかと考えたとき，日本人としてもっと日本のこと，日本文化のこと，そして自身の大学のことをよく知り，それらを英語でしっかりと伝えることの必要性を学んだ。

また，LICMU のスタッフだけでなく，研修期間中チェンマイ大学の学生や香港大学の学生と会話をする機会があったが，そこでも他国の大学生の英語力の高さに驚いた。中には英語だけでなく，第 3 言語も修得している学生もおり，大きな刺激を受けた。

また，同プログラム中にはタイ文化を学ぶアクティビティカリキュラムも含まれており，引率の LICMU スタッフも当然のように英語での案内･説明を行うため，座学だけでなく身体で英語を学ぶ機会も設けられ，英語に対する興味・関心を高めるプログラム構成になっている。

タイの伝統文化体験では，アカデミックな切り口からもタイの伝統文化を学ぶことができ，講義で培った語学力を活かす絶好の機会にもなった。

図 4. 現地スタッフの案内で訪れた芸術文化センター

4.4. 次年度以降の開催に向けて

留学期間中の研修自体については充実したプログラムであったといえるが，前述したとおり研修前後のサポートが不十分であるため，帰国後の継続学習は本人のモチベーションや所属部署での繁忙具合によるところが大きい。参加者で振り返りを行ったところ，参加者 5 人中の 3 人は英会話教室や自主的な勉強会の開催により継続学習ができているが，それ以外は現地で知り合った友人とのメールや SNS でのやりとり程度で終わってしまっている。14 日間という留学としては比較的短い期間であったため，英語能力自体より英語を話すことへの抵抗が無くなったという印象が強く，帰国後に英語を話す機会を継続的に持つことをできるかどうかが重要である。また，本学が事務職員に求めている「グローバル人材」の定義が参加者間において共有されていないため，留学前後においてもその認識についてはばらつきが生じることもある。本学のグローバル化を推進していくためにも事務職員が目指すべきロールモデル等の指針があればより効果的に研修に取り組むことができると考えられる。

5. まとめ

講義の中で英会話の基礎を学び，練習を積み，これまで訪れたことのない地へ足を運び，そこで暮らす人々や集まる人々に自ら率先して英語で話しかけた。その中で，うまく自分の言いたいことを表現出来ない，相手の言っていることが分からないということが何度もあった。それでも，今回の研修で学んだことを最大限に引き出して，何とか英会話を実践し，初めて出会う異国の人々とコミュニケーションをとることは，大変貴重な経験となり，我々に大きな達成感と成長をもたらした。このことは，日本国内で英語を学ぶだけでは決して出来ない経験であり，現地に行ったからこそ体験できたことである。

本研修プログラムは集団での参加であり，海外経験が少ない職員でも比較的参加しやすいものである。今まで海外渡航歴がない職員もいたが，まったく支障なく参加することができた。次年度以降も同様のレベルを想定するのであれば海外経験が少なくグローバル化や英語に関心が低い職員（TOEIC400 ～ 600 程度）への「動機づけ」といった位置づけの研修にすることが望ましいと考えられる。短期間であるため参加することによる語学力の大きな向上までには至らないが，海外経験の乏しい職員にとって，「海外に慣れる」といった経験としては十分である。とりわけ内向き志向が強いといわれる大学の事務職員にとってこのような海外での研修は大変効果的であるといえる。

また，可能であればさらに英語能力の向上を目的とした，ある程度の英語能力を持っているものの長期留学の経験がない職員（TOEIC600 ～ 750 程度）の「発展支援」となるクラスが設置されれば参加者の選択肢はより広がると考えられる。前述したとおり本研修プログラムはアメリカなどの短期語学研修よりも半額以下の費用で参加するこ

とが可能であることから，多くの職員を派遣し，学内にグローバルな風土を広める足掛かりに繋がるプログラムと言える。特に少人数での語学教育により，英語でのプレゼンテーションやスピーキングにおける自身の強みや弱みを認識する良い機会となり，非常に効果的であった。常に英語を話す環境（英語を話さないと生活ができない環境）に身を置くことにより,「英語を話す」ことへの抵抗感を払しょくでき,「英語を話す」自分に自信を持つことができるプログラムである。

また，LICMU のスタッフ･学生の英語力，そして学びに対する意欲は非常に高く，先進国の日本で生活をしている我々としては，強い危機感を覚えたのと同時に，英語学習へのモチベーションの向上にも繋がった。短期間ではあるが，他国の大学機関で学び, 他国の大学職員と触れ合うことは, 大学職員としての知見を広げる良い機会となった。そして，タイの文化に触れることができた点も，グローバルな視野の拡大，価値観の共有に繋がったと言える。このことは宿泊先をホームステイから学生寮に変更したことも寄与しており，タイ人だけでなく，中国人や欧米人など，様々な留学生と交流をする機会にも繋がり，グローバルな視点での文化や考え方の違いに触れることができる点も効果的である。加えて, 彼らとの交流時に, 日本について問われることも多く，日本文化を海外で伝えることもグローバル人材に必要な資質であると感じることができた。

謝辞

同研修プログラムへの参加は，語学能力の向上だけではなく本学への帰属意識をより一層高めることにも繋がった。開催初年度にあたる本研修プログラムは関係の職員の多大な努力なくして実施はできなかったと考えられる。このような貴重な体験を与えて下さった大学および研修中の不在時をフォローしていただいた各職員に対して，この場を借りて感謝を申し上げたい。また，今回の経験を活かして今後は学内のグローバル化への取り組みに積極的に貢献できるよう自己研鑽に励みたい。最後に, 現地で我々の研修を 14 日間サポートしていただいた Karim A Hussain 氏をはじめとする LICMU スタッフへ感謝の意を述べて本報告のむすびとする。

参考文献

コーンケーン大学企画部「コーンケーン大学及びタイ高等教育機関の国内・国際ランキング」

綾部恒雄、林行夫（編著）（2003）タイを知るための 60 章．明石書店

綾部恒雄（編著）（2014）タイを知るための 72 章．明石書店

在チェンマイ日本国総領事館（2014）チェンマイ情報総 論．http://www.chiangmai.th.emb-japan.go.jp/chiangmai/soulon.pdf

経済産業省（2003-2012）海外事業活動基本調査　第 34 回～第 43 回調査結果.

京都産業大学事務グローバル PT（2013）事務 PT 英語力向上アンケート.

English Language Training in Language Institute Chiang Mai University

Tatsuo YAMASHITA[1], Kohei HOTTA[1],
Katsunobu SATO[2], Daisuke HAYASHI[3],
Takehiko KITABA[4]

Recently, it has become necessary for universities in Japan to promote the development of global human resources. For this purpose, universities must also raise awareness of qualities that constitute a global human resource. In line with this trend, Kyoto Sangyo University has increasingly been placing an emphasis on raising awareness not only among students, but also its staff. In August, 2014, a group of administrative staff were sent on a 14 day English training program through the Language Institute Chiang Mai University(LICMU)where the participating staff experienced a truly global learning community. Through this program, the staff were able to improve their language skills and attain an understanding of traditional Thai culture. The aim of this report is to provide an outline of the program as a guide for future staff considering participation in this program.

KEYWORDS: Overseas language training, English training, Self-development, Staff-development, Global

2015 年 2 月 23 日受理

1 Department of Student Affairs, Kyoto Sangyo University
2 Center for Academic Affairs, Kyoto Sangyo University
3 Center for Career Support, Kyoto Sangyo University
4 Department of Accounting and Finance, Kyoto Sangyo University